

## 逆鞘，インフレリスクと変額保険(要旨)

筑波大学社会科学系 青葉暢子

生命保険は保険料の支払期間がしばしば20年以上にもなるので、保険者は契約前期に資金を蓄積し、契約後期の保険金支払に備える。ところが保険期間が長期にわたるため、定額保険のように給付される保険金額が一定の場合、インフレによる保障の目減りが避けられない。そこで、保険料の一部を主として株式などの有価証券に投資し、その成果を被保険者の持分にに応じて配分し、保障の実質価値を維持しようとする保険が変額保険である。変額保険は日本では、1976年(昭和21年)に導入された。この変額保険の一種である「利率変動型保険」が昨年発売された。

利率変動型保険は金利が上昇に転じたときに利率をキャッチ・アップすることができるため、金利上昇によって魅力を感じなくなった消費者の解約を防ぐ効果がある。

本論文では、最初に八木・西垣(1993)をサーベイすることによって、定額保険の非効率性と、その非効率性が物価の上昇によってどのような影響を受けるのかということを示し、変額保険と定額保険のそれぞれの存在意義を調べる。次に、Black-Scholes(1973)のモデルを用いて、変額保険の価格を記述し、変額保険のインフレ調整の仕組みについて調べられる。その結果、物価上昇は時間選好率が非常に大きい場合、定額保険の非効率性を拡大する可能性があるが、時間選好率が利子率よりも小さい場合には物価上昇が定額保険の非効率性を縮小することが示される。

変額保険は、元来、インフレに対応する保険として導入されたものであるが、この場合、物価上昇が見込まれると、保険金の名目価値を引き上げることによってインフレ調整が部分的に行われうる。そのため、時間選好率が非常に大きい場合、定額の非効率性を拡大する可能性を多少弱めることができる。定額保険の場合も、時間選好率が利子率よりも小さいときには、物価の上昇によって定額保険の非効率性が縮小する可能性がある。時間選好率の大きさによって、定額保険か変額保険が選ばれることが示される。